

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑨

文学部附属漱石・八雲教育研究センター

熊本大学は、地域志向の教育・研究・社会貢献活動を積極的に推進し、研究成果の地域社会への還元を強化するとともに、地域の歴史や文化を探究し、国際性豊かで活力のある熊本・九州の発展に寄与することを基本的な目標に掲げている。

こうした取り組みを人文社会科学分野から展開するための拠点の一つとして、二〇一七（平成二十九）年十二月九日、「文学部附属漱石・八雲教育研究センター」が設置された。背景には、国内外に多くの愛読者がいる漱石と八雲（ハーン）が熊本に居住し第五高等学校で教鞭をとっていたという歴史、ならびに漱石・八雲ゆかりの地としての熊本における関連資料や研究が県内外および国内外から注目されているという現状がある。こうした状況に鑑み、総合的な拠点的研究を組織しその成果を定期的に発信するとともに、文化行政機関との連携によって市民講座・セミナー・フォーラム等を開催することにより文化振興に貢献することを主な目的として、本センターは活動を開始した。

センターの業務に従事する兼務教員（大学院人文社会科学研究所専任教員）は現在七名である。日本文学、英米文学だけでなく、ドイツ語圏、フランス語圏、中国語圏の専門家の存在により、センターの特色である多文化共生に基づく実践が可能となっている。

教育については、兼務教員各自が、担当する教養教育、専門教育（文学部）の授業で、漱石、八雲（ハーン）を取り上げている。研究としては、漱石とハーンの論文、翻訳を収録する欧文雑誌 *Soseki and Hearn Studies* を二〇二〇（令和二）年の創刊号から二〇二四（令和六）年三月の第五号まで毎年発行してきた。また、近年は社会貢献に重きを置き、セミナーやシンポジウム、公開講座等を関係団体と連携し積極的に開催している。

特筆すべき教育・研究・社会貢献の成果としては、次の二点が挙げられる。NPO法人くまもと漱石文化振興会と連携し執筆・編集に取り組み、二〇二二（令和四）年に出版した『アイラヴ漱石先生』、漱石探求ガイドブックが、二〇二三（令和五）年に熊本日日新聞主催による「第四十四回熊日出版文化賞」を受賞した。

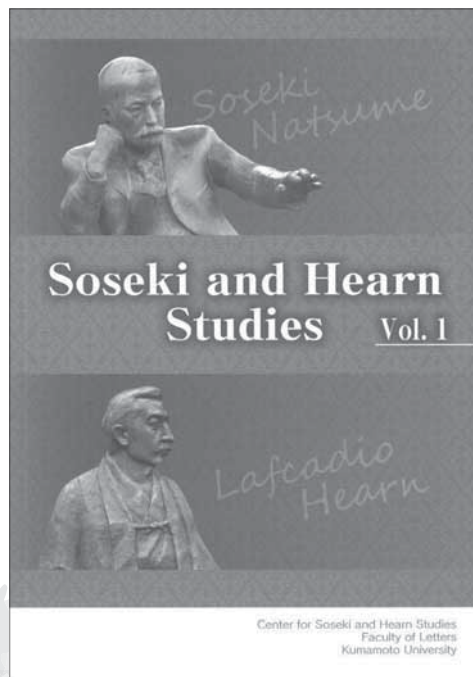
二〇一九（令和元）年に八雲（ハーン）に関する貴重書ウッドレイ・ベイツコレクション（アメリカ人コレクターによるラフカディオ・

ハーン関係図書）を搬入し、二〇二〇（令和二）年に附属図書館学術資料調査研究推進室所蔵のハーン関連貴重書をセンター室に移動・配架した。二〇二四（令和六）年には、熊本大学キャンパスミュージアム構想の支援を受け、コレクションのカタログ *The Woody Bates Collection of Lafcadio Hearn Books* を作成した。

熊本大学大学院人文社会科学研究所教授 新井英永



第44回熊日出版文化賞作品
『アイラヴ漱石先生』（2022）



2020年創刊のセンター欧文雑誌
Soseki and Hearn Studies Vol.1

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑩

文学部附属国際マンガ学教育研究センター

熊本大学は「国際的な研究拠点を志向する地域起点型大学」として教育・研究・社会貢献に取り組むことを目的としている。人文社会科学分野における国際的研究と地域貢献を前進させるための特色ある新しい分野の研究拠点として、二〇二二（令和四）年十月一日付で「文学部附属国際マンガ学教育研究センター」が設置された。本センターは、国際的研究拠点形成と成果の国際発信（研究）、現代文化資源研究開発人材の育成（教育）、アーカイブ化による地域文化資源開発（社会貢献）を三本柱に、マンガを中心とするメディア芸術を対象とした研究の拠点を整備することで、産官学連携による「マンガ県くまもと」構想の中核的役割を担うと同時に、国内外のメディア芸術・現代文化研究をリードするような研究機関となることを目指している。

熊本大学文学部では、二〇一九（平成三十一）年に新たな研究教育領域として「現代文化資源学コース」を設置した。二〇二三（令和五）年には博士前期課程の新コース「現代文化資源学研究コース」が設置され、二〇二五（令和七）年には博士後期課程の新領域「現代文化資源学領域」設置が予定されている。学部から大学院博士課程までの一貫した教育を提供するための新たな体制を整えるこうした動きとあわせて設立されたのが本センターである。マンガやアニメは日本を代表するポピュラーカルチャーとして海外からの関心も高いが、専門的な研究・教育を組織的に行っている国立大学は少ない状況である。全学的な支援の下で特色ある新たな研究分野の開拓が期待されていると認識している。

現在四名の兼務教員（大学院人文社会科学部専任教員）がセンターの業務に従事している。



2022年12月10日に開催されたセンター開設記念シンポジウムの様子



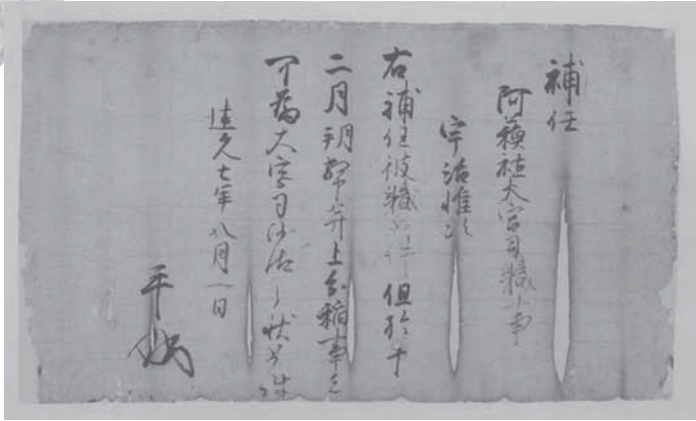
兼務教員の池川佳宏准教授が考案・熊本大学が実用新案を取得した「中綴じマンガ雑誌用収蔵ダンボール」

事している。センターの立ち上げから約二年と日が浅く、まだまだ研究環境を整備する途上にあるが、二〇二四（令和六）年度は新たな学術雑誌の創刊、熊本市内の五福公民館での連続セミナー「熊本大学マンガ学講座」「熊本のマンガ研究者たち」開催など、対外的な情報発信を強化している。過年度の成果としては、文化庁メディア芸術連携基盤等整備推進事業でマンガ刊本（雑誌・単行本）の保存・活用に関する相談窓口「マンガ刊本アーカイブセンター（MPAC）」業務受託、「中綴じマンガ雑誌用収蔵ダンボール」の実用新案取得および熊本県内企業とのライセンス契約、熊本日日新聞社主催「熊日マンガ文化賞」の選考協力などが挙げられる。今後は海外の研究教育機関と連携した共同研究や国際シンポジウム開催等の国際事業を本格的に強化していきたい。

熊本大学大学院人文社会科学部准教授 日高利泰

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑪

阿蘇家文書



建久7年8月1日付北条時政阿蘇大宮司職補任状

熊本大学附属図書館に架蔵されている阿蘇家文書は、肥後一宮阿蘇神社の旧大宮司家である阿蘇家に伝来した古文書群である。阿蘇家は一九五七（昭和三十二年）年に、中世文書（平安・戦国、一部江戸を含む）約三〇〇点と三六冊の転写本を熊本大学に譲渡した。これにともない「御屋敷文書」と呼ばれた、八四八点におよぶ阿蘇大宮司家の近世文書群（近世阿蘇家文書）も熊本大学に移管している。このうち近世阿蘇家文書を除く文書群は、一九八七（昭和六十二年）に国の重要文化財の指定を受けた。

熊本大学では重要文化財指定以来、阿蘇家文書の修復につとめ、二〇〇五（平成十七）年には新装の三四巻の巻物として蘇った。この三四巻に収められた文書のデジタル画像は、熊本大学附属図書館のWEBサイトで公開され、学術利用の条件が整えられている。

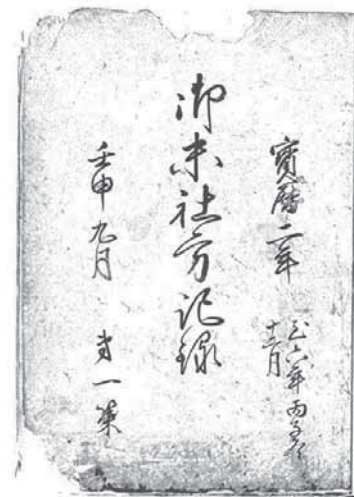
阿蘇家文書の際立った特徴は、阿蘇大宮司が神職の長であるとともに武家の棟梁でもあったという性格を反映し、神社文書と武家文書という二つの性格をあわせもっているという点にある。さらに現在の阿蘇家文書には、権大宮司家、大宮司家の一族、供僧、社家、三末社（甲佐・健軍・郡浦）などがかつて所持した文書群も包摂されており、さまざまな社会集団が集積して活用した中世文書の一大アーカイブズとしては日本屈指の存在といえる。

近世の阿蘇大宮司は阿蘇宮（現阿蘇神社）と坊中（山岳仏教集団）を支配下に置くとともに、末社支配を通じて熊本藩の寺社政策の一翼を担った。また独自に家臣も抱えていたことから、近世阿蘇家文書には阿蘇宮の社家・末社・大宮司の家臣・坊中の支配に関わる記録と熊本藩との往復文書の控えとが冊子体で残されている。藩政史料だけでは解明できない近世の宗教・政治・地域社会の姿を浮かび上がらせる可能性をもつ史料群といえよう。

阿蘇家文書を用いた近世の研究は長らく低調であったが、その一因は近世の阿蘇大宮司家・阿蘇宮関係文書が、熊本大学・阿蘇家・阿蘇神社の三者に分散して所蔵されている点にある。阿蘇家には阿蘇の神話や神社の由緒を記した史料や古典籍類も豊富に存在する。また、近年では阿蘇家や阿蘇神社から中世の新出史料も発見されている。

こうした現状を踏まえ、熊本大学が所蔵する阿蘇家文書を有効活用するために今必要なことは、阿蘇家・阿蘇神社所蔵の史料群もあわせた全体把握と、時代や学問分野を超えた共同研究の推進の二点ではないだろうか。

熊本大学大学院人文社会科学部教授 春田直紀



宝暦2年9月付御末社方記録

中世の阿蘇家文書は従来、鎌倉・南北朝時代の政治史および中世の神社と社領を解明する上での一級史料として活用されてきたが、文書の様式・機能・活用・保管・伝来

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑫

熊本大学文書館



熊本大学文書館は二〇一六（平成二十八）年度に設置され、二〇二三（令和五）年四月一日付で「歴史資料等保有施設」の指定を受けた。大学からの情報発信と地域社会との連携を目指し、熊大と地域の歴史的・社会的記録の永続的保管と公開に関する基盤施設になるべく、日々の活動に取り組んでいる。

本館では、①熊本大学の歴史②熊本地域の歴史と文化③熊本で起きた社会問題（免田事件・水俣病・ハンセン病）に関する資料を収集・整理・保存・公開している。業務として、資料利用者への対応、学内刊行物の収集・寄贈受入手続き、受入資料のクリーニング、媒体に応じた保存、目録作成と公開作業を行っている。閲覧・撮影複写・貸出などの利用が可能な資料の目録（一覧）を本館ウェブサイトに掲載しているほか、電話やメールでの相談も受け付けているので気軽にご連絡いただきたい。

- 【公開中の資料】約三万点 ※（ ）内は概数
- ・大学史 約一万二千点・熊本総合大学期成会資料（二〇〇〇点）、熊本大学三十年史編集室資料（一〇〇〇点）、熊本高等工業学校採鉱冶金学科関係映像資料（四点）、熊本大学発行・刊行物等（七四〇〇点）ほか
 - ・熊本地域 約四四〇〇点…末吉駿一コレクション（四〇〇〇点）ほか
 - ・水俣病関係 約一万二〇〇〇点…水俣病研究会資料（三〇〇点）、岡本達明資料（三八〇〇点）、徳臣晴比古資料（二〇〇点）、丸山定巳資料（六五〇〇点）ほか
 - ・免田栄資料（八六〇点）

また本館では、誰でも参加できる一般公開イベントや所蔵資料を紹介する企画展を毎年度開催しており、年度ごとの活動についてまとめたニューズレターの発行や、メディアとの連携といった広報活動にも力を入れている。ニューズレター創刊号／第三号のPDFファイルは本館ウェブサイトにて閲覧可能である。今後も本学における社会連携の要となるべく尽力したい。



文書館（閲覧室・事務室）：熊大の前身校の一つである熊本高等工業学校の書庫として使われていた建物



企画展「熊本総合大学期成会資料展」：熊大設置の道筋と設備充実に関する資料36点を展示

- 【二〇二三年度の企画展とイベント（主催／協力）】
- ・桑原史成写真展「いのちの物語―水俣からウクライナまで―」（四月・五月・協力）
 - ・免田事件再審無罪判決四十周年記念RKK熊本放送制作・著作番組「執念／生き抜いた死刑囚」上映会（七月・主催）
 - ・企画展「水俣の《声》に耳をすませる―録音・民衆・記憶―」（きこえくる熊本の《歌》と《声》内の企画）（九月・協力）
 - ・企画展「熊本総合大学期成会資料展」（十一月・主催）
 - ・一般公開セミナー「ひとり・がたり―公害の記憶と記録の交差点から―」（二月・協力）

熊本大学文書館 電話：〇九六―三四二―三九五、ウェブサイト：<http://archives.kumamoto-u.ac.jp/>
開館日時：月・金 十時～十六時半（祝日・年末年始・夏季一斉休業日は休館）
※資料利用は事前予約制。利用希望日までの日数に余裕を持ってご連絡ください。

熊本大学文書館特任助教 香室結美

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑬

工学部研究資料館

一八九七（明治三十）年に設置された第五高等学校工学部は、一九〇六（明治三十九）年に独立し熊本高等工業学校となった。同時に設置された仙台の他、東京・大阪・京都・名古屋と全国にあわせて六校が整備された。帝国大学へ進学するための大学予科と異なり、卒業後に我が国の工業化社会を支える優秀な技術者を養成したのが高等工業学校である。

校舎は第五高等学校工学部があつた現在の黒髪北キャンパスから、白川沿いの黒髪南キャンパス（敷地二万坪）に移築・新築された。工学部研究資料館として公開している建物は、旧熊本高等工業学校の機械実験工場として一九〇八（明治四十二）年新築されたもので、一九九四（平成六）年に国の重要文化財に指定された。

内部には、一九〇六（明治三十九）年に購入された十五尺旋盤、十尺旋盤、ボール盤、平削盤をはじめ、実験工場で使われてきた工作機械一式が動態保存されている。いずれも海外で実用されていた当時最先端の機械で、これらを学生実習用に整備するアイディアは初代校長中原淳蔵（一八五六―一九三〇）の発案と言われる。

一旦は動かなくなっていた工作機械類は、一九七七（昭和五十二）年の工学部研究資料館の開館にあわせ、技術職員が一年余りをかけて修復を成し遂げた。百年以上前の機械が動く状態で残る例は世界的に貴重で、二〇〇七（平成十九）年に日本機械学会の機械遺産に認定された。

工学部研究資料館では、毎月第三木曜日に一般公開として機械の動態展示を行っている。資料館の収蔵品はほかにも、各学科の教育・研究で使用されてきた鑿岩機、試験用変圧器、球形光束計や、橋梁模型、手廻し計算機などのほか、工業高等学校の卒業アルバムや写真、教科書やノート、卒業論文、またか



災害復旧工事が完了し公開された工学部研究資料館
（壁面に連続アーチ窓と控壁が交互に並ぶ）



工学部研究資料館の機械展示
（走行クレーンを置く中二階から見下ろす）

つての学生寮である「工友寮」の日記等、多岐にわたる。
二〇一六（平成二十八）年の熊本地震で、煉瓦壁に亀裂が入り、屋根の木造小屋組にも被害が出た。機械実験工場としての役割から、壁面に連続アーチ窓を設け、走行クレーンを内部に設けるなど、広く明るい建物としたことが被害を大きくした。幸いなことに、二〇一一（平成二十三）年の東日本大震災で被害を受けた文化財を担当した専門家が工学部研究資料館の災害復旧工事を担った。これまでの地震の経験を踏まえ、最新の構造補強が施され、かつ美しい外観を損なわれない工夫が随所に凝らされている。床下発掘調査から機械を動かす蒸気機関室とボイラー室の位置や、地下の煙道も新たに発見された。二〇二二（令和四）年二月に工事が完了し、同年四月より一般公開を再開した。現在、復旧で明らかになった新たな価値を活かした展示を準備中である。

熊本大学大学院先端科学研究部准教授 吉武隆一

埋蔵文化財調査センター 構内遺跡

熊本大学が所有する敷地は、その来歴ゆえに熊本市内に八カ所あり、それぞれが「周知の埋蔵文化財包蔵地」、いわゆる遺跡の範囲内にある。本学の学生・教職員が日々活動する足元には、遺跡が眠っているのである。

過去、これらの敷地がまとまる機会があった。一九八二（昭和五十七）年、当時の熊本県知事が「熊本テクノポリス構想」を表明し、その一環として本学に移転を要請したのだ。十余年の議論の末、本学は現地再開発を決定し、大学運営と埋蔵文化財（以下「遺跡」）の保護の、両立の道を歩むこととなった。他大学で設置されていた調査組織を参考に、一九九四（平成六）年、熊本大学埋蔵文化財調査室（現埋蔵文化財調査センター）以下「埋文センター」が発足した。文学部の教員室を執務室としてスタートし、現在は白川を望む建物で、事業対応と普及活動を行っている。

埋文センターは、建物新営・インフラ整備等で、遺跡の消失が免れない場合に、遺跡を記録の形で残す「記録保存」のための発掘調査を実施する。したがって、記録Ⅱ発掘調査報告書の刊行が発掘調査の完了であり、埋文センターと大学の重要な責務である。

構内遺跡は、前身の第五高等学校等の創設時に、ある程度のダメージを受けたが、早くに学校敷地として確保されたため、その後の開発は最小限にとどまった。おかげで遺跡の残り具合は良い。ただし、発掘調査は遺跡を解体する、一つの破壊行為でもある。そこで埋文センターと施設部は、事業の設計・施工に蓄積してきた構内遺跡の情報を反映させ、発掘調査の回避、円滑な事業推進・経費削減につ



市内の遺跡と本学敷地



埋蔵文化財調査センター



展示室の様子

なげている。また、重要な遺構は、現地に保存している。せつかく残された遺跡である、可能な限り未来に残したい。

さて、構内遺跡は黒髪地区・本荘地区を主として奈良・平安時代の公的な建物跡や文字が書かれた土器、役人の帯飾り、土馬（祭祀具）などが出土している。また、黒髪地区では弥生時代・縄文時代にさかのぼる墓や土器・石器も出土している。本荘地区では水田や古墳時代の集落も発見され、土地利用の変遷が見えてきた。熊本歴史を解明する重要な成果が、着実に積み重ねられている。

埋文センターでは、出土遺物を展示しているほか、希望に応じて土器の復元作業等の様子も公開しており、授業の一環で訪れるゼミや重さを、手に取って体感してもらうようにしている。

出土遺物は、考古学という学問の学術資料である。展示の見学は、多くの学生にとって自身の専門以外の学問の一端に、隙間時間に触れられる機会でもある。大学ならではの環境であり、教育資源としての大学における調査組織の意義がここにある。

古代の人々の残したモノの内には、新しく何かを創造する種が隠れているかもしれない。多く人に、埋文センターを訪れてみてほしい。埋蔵文化財調査センター准教授 大坪志子

埋蔵文化財調査センター 縄文時代の遺物と墓

埋蔵文化財調査センター（発足当時は埋蔵文化財調査室）は、熊本大学構内遺跡の発掘調査を三〇年にわたって実施してきた。黒髪キャンパスは黒髪町遺跡群の上に立地しており、これまでに縄文時代早期末（約七千年前）から近代にいたるまでの遺物・遺構が発見されている。

二〇一三（平成二十七）年には熊本大学黒髪南地区の理学部棟周辺のライフライン再生工事に伴う発掘調査が行われた。調査地一帯は従前の調査で奈良・平安時代の竪穴建物や掘立柱建物などが確認されており、この調査でも同時代の遺構や遺物の発見が相次いだ。しかし、調査から約半年が経ち、予期しない時代の遺物や遺構が発見され調査者を驚かせた。これまで調査が及ばなかった土層から縄文時代後期の土器や石器などの遺物が大量に出土したのである。今から約四千年前、理学部棟周辺の地形は、立田山から白川に向かって緩やかに傾斜しており、川岸にはいくつもの河岸段丘が形成されていた。発見された縄文時代の地層は低位の河岸段丘上に位置し、これまで地下深くに埋もれていたのである。

出土した遺物は御手洗A式古段階といって、縄文時代後期前葉（約四千年前）の土器が主であった。在地系の土器である深鉢は、粘土紐であしらえた突帯と連続する刺突文で飾られており、口縁にある四カ所の山形突起の内側にも刺突文が施される特徴がある。同じ土層からは瀬戸内地方から伝播したとされる磨消し縄文が施された鉢も出土した。異なる二系統の土器が同一層から出土しており、本時期の土器文化を知る上で学術的価値の高い資料群である。このほか石鏃や敲石などの石器、そして割れた土器片を研磨し再加工した土製の錘も見られた。イノシシの骨の一部も見つかったっており、立田山や白川で狩猟や漁撈に従事した縄文人の姿が浮かび上がる。



写真1 縄文時代後期前葉の土器群（黒髪南地区1310調査地点）



写真2 配石墓に埋葬された女性人骨（黒髪南地区1310調査地点）

調査地の南東端、地下約二mからは縄文時代の人骨と墓が発見された。男性と女性の二体で、後者は川原石によって囲まれた配石墓という埋葬施設に葬られていた。女性の人骨は親知らずが生えそろう成人だったが、大腿骨の長さから復元すると身長約一四三cmと小柄で華奢な身体的特徴が確認されている。

一九五三（昭和二十八）年の洪水で知られるように、白川は水害の多い河川だが、本遺跡の堆積層からも当時少なくとも二度にわたる縄文人の活動領域で洪水または冠水が発生したことが判明した。本調査では竪穴住居は見つからなかったが、今後、より上位の平地に生活空間が確認される可能性もあり、縄文時代の集落構造を理解する上でも重要な発見となった。出土した遺物の一部は本センターの常設展に陳列されているので、多くの人にご覧いただき、縄文人の営みに想いを馳せていただきたい。

埋蔵文化財調査センター助教 山野ケン陽次郎

熊本大学キャンパスミュージアムへの招待⑬

熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター 地域デザイン部門デジタルアーカイブ室



写真1 工学部1号館前の災害遺構看板

熊本大学デジタルアーカイブ室では「ひのくに災史録」の活用を議論するための活動チームTERADA (Team of Education and Research According Digital Archive) を学生と教員で結成しています。TERADAは熊本大学の前身である第五高等学校で学び「天災は忘れた頃にやってくる」の言葉を残した物理学者寺田寅彦に由来しています。TERADAでは、三つの活動理念…①データと人をつなぐ、②できたこと、できなかったことをつなぐ、③現場と教育をつなぐ、を有し、災害を伝え、次に備える行動へ結び付けることの研究と実践を重ねています。

「ひのくに災史録」とは、二〇一六(平成二十八)年熊本地震の経験を教訓として熊本大学全体で共有し、今後の防災対策・災害対応に活かすために構築されたデジタルアーカイブ(記録などをデジタル化して保存するシステム)を指します。熊本地震からの復旧・復興から得られたノウハウや教訓を記録・整理し、教育や研究での活用を推進しています。ひのくに災史録は写真やメール、PDFなど熊本地震発災当時の記録だけを収集するのではなく、将来的には熊本大学永青文庫が所有する明治二十二年熊本地震の記録や寛政四年島原大変肥後迷惑等の過去の災害についても収集していく予定です。二〇二二(令和三)

年)からは、全学部生が受講できる講義において、ひのくに災

史録を活用した防災学習を行っています。

二〇二二(令和三)年四月には、熊本大学工学部一号館前など熊本大学黒髪キャンパス内に三カ所(二〇二二(令和四)年に二カ所追加)「災害遺構看板」を設置しました。この災害遺構看板には①データと人をつなぐの実践として、QRコードが掲示されており、「ひのくに災史録」の閲覧を案内することができ、熊本地震の記憶や教訓を知るきっかけを提供しています(写真1)。

二〇二二(令和四)年六月からは、③現場と教育をつなぐ実践として、デジタルアーカイブ室の活動を広く知って頂くこと、熊本県をはじめ県内の自治体と協力して「熊大TERADA災害アーカイブ展」を実施してきました。第一回災害アーカイブ展は益城町復興まちづくりセンター「にじいろ」にて、デジタルアーカイブや震災アーカイブに関するポスターをご覧いただきながら、教員や学生たちと来場者の方々が交流し、防災や減災、持続可能なまちづくり、そしてデジタルアーカイブの重要性について学んでいます(写真2)。

熊本大学大学院先端科学研究部准教授 田中尚人



写真2 益城町で実施した災害アーカイブ展